

序 言

東京都江戸東京博物館では開館以来、常設展示や特別企画展などの展示に関する調査研究のほか、江戸東京に関する歴史と文化の研究である年間特定研究、他の学術機関や博物館などとの共同研究、館蔵品の基盤研究など、さまざまな調査研究を推進している。そして、その研究成果を報告書として毎年刊行してきている。

今年度の研究報告書は、年間特定研究「城郭都市江戸と江戸城」の成果の一つで、昨年度の都市歴史研究室主催のシンポジウム「太田道灌と城館の戦国時代」のパネル報告6本と館蔵資料の紹介2本で構成した。このシンポジウムは、埼玉県立嵐山史跡の博物館および東京都葛飾区郷土と天文の博物館の両館で開催されたシンポジウムと連携して開催されたものである。博物館同士の共同研究によるシンポジウム開催は、当館としては初めての試みであった。シンポジウムに連動して、特集展示「太田道灌とその時代」が当館常設展示室で開催され、えどはくカルチャーで関連講座「戦国時代の関東を考える」を実施した。

館蔵資料の紹介論考の一つは、喜多川周之コレクション中の小川一眞撮影「凌雲閣百美人人工着色写真アルバム」についてである。小川一眞は、幕末に忍藩に生まれ、明治維新後に渡米し写真技術を学んで1885年（明治18）に帰国し、それ以後写真師として活躍した人物である。もう一つは、「登科録」の全文翻刻である。「登科録」は、寛政の改革時に松平定信の提案により実施された幕吏登用試験に相当する学問吟味の合格者名簿であり、貴重な資料である。

本研究報告書が、博物館活動の一端として、さまざまな方々に寄与すれば幸いである。

2009年3月31日

東京都江戸東京博物館 都市歴史研究室